

新聞は情報の宝庫！

～新聞記事から卒業レポート題材を見つける～

中 川 謙

帝塚山学院大学 リベラルアーツ学部 教授

○中川 では、これから 40 分ほどですが、皆さんと一緒に新聞を考えていきましょう。皆さん、多分新聞って難しいな、読みづらいなと思っていませんか、どうですか。新聞大好きですか。毎日読んでいますか。読んでいませんね。残念ながら。読みづらいと思っていますか。とっつきにくいなと思っていますか。

多分そうなのかもしれませんが、皆さん最初から、新聞はもうはなから読みにくい決め込んでいる節もありますね。やっぱり心は開いたほうがいいと思うんです。

人間だってそうですよね。あいつちょっと難しそうな顔してるな、言っていることも何か難しそうだから、あんなやつつき合わんところと思ったら何も始まりません。やっぱり心を開いてぶつかれば、相手も必ず心を開きます。新聞も心を開きます。皆さんにとって最初に必要なのは、僕は、新聞は難しいという身構える姿勢をちょっと解いてほしい。そういうことです。そうしなければきっと新聞は皆さんにとってまた別物のように優しい笑顔を見せてくれるかもしれないんです。体当たりで新聞にぶつかろうという感じで行きたいと思うんです。

そこで、最初やるなら、まずとにかく世の中で難しいと言われている国際面、国際報道から体当たりでぶつかっていってみましょうね。パート 1 お願いします。

まず新聞の読み方、パート 1 は国際面に挑戦してみようということなんです。そこで、皆さんに最初に取り組んでももらいたいことがあります。時間がないから 1 分ぐらいにします。皆さんのお手元にある最初のこの紙ですね、3 本の記事が並んでいます。記事というよりも紙面が並んでいます。皆さんに注目してほしいのは、一番左の紙面、これは紙面を縮小した上に一部切っています、非常に読みにくいかもしれませんが、ちょっと省エネ、省資源の観点からこういうことをやりました。この中に大体記事の項目として 8 本の記事がここには載っていることがわかりますが、この中にとんでもない記事が 1 本入っているんです。とんでもないということは、世界を揺るがす世紀の大事件の先駆け、前ぶれ、予告になるような大きな事件の前ぶれなのです。

そういうものがさりげなくさっと盛り込んでいるので、そういうのを見逃すのは、やっぱり新聞を読まないのはもったいないなという気がするんですね。1 分間、ヒントを出します。新聞で一番大切なのは日付です。ここまで行くとわかりますね、2001 年 9 月 11 日の朝刊です。横に何か関連した記事が並んでいますね。そうすると、これは何に関連していることをきょうこいつ

は話をするのかなということが、ある程度予測がつくはずですよ。あ、何かもう見つけたようですね。見つけましたね。まだ見つけていませんか、まだですか、何かその辺指さして、どうですか。どうですか、まだ。

見つけたという人、手を挙げてくれませんか。見つけましたか。どうですか。ちょっと見出しだけ読んでください。

○ 「アフガニスタンで暗殺」の記事。

○中川 ピンポンです。どうしてそれだと思いましたか。どうしてですか。

○ タリバーンという記事。

○中川 タリバーンという記事、言葉に反応してくれたということは、非常にもうレベルの高い読者だということと言えますね。皆さんもタリバーンとかアフガニスタンという言葉に、もし、なじみがなかったとすれば、きょうから皆さんはタリバーンもしくはアフガニスタンの専門家だというふうに自負して、きょうから新聞を読む目をちょっと変えてくださいね。

まさにそのとおりです。この記事が次に起きるこの大事件の前ぶれだったわけですね。タリバーンという言葉でそれにひっかけたというその知識は大変なことです。本当にこの中学はレベルが高い、改めて感心させてもらいました。そうなんです。

では、どのように変わっているのか、これから少し読み解いていきましょうね。この記事という、皆さんは、あなたは中学2年生ですか、3年生、2年生。この記事のころは、まだ皆さんは3歳か4歳か、そんなことで実際に記憶はありませんね。だけど、こういう事件があったということは知っていますね。世紀の大事件です。まず、この映像を見てみましょうね。

これはアメリカのニューヨークにある貿易センタービルといって、100階建てのビルです。今このビルに飛行機が突っ込む、その寸前ですね。もう煙が上がっているんです。どうしたんでしょうか。

この向こう側に同じビルが並んでいるんです。やっぱり100階建てのビルです。ですからツインタワーとも言われていますね。既に別の飛行機が突っ込んで爆発、炎上し、まさに崩落しようとしているところです。これはもう1機が突っ込む寸前で、その一瞬先、やっぱり同じことが起きていたわけですね。これがまさに2001年9月11日に起きた同時テロ。9.11ということですね。これがなぜさっきの短い記事とつながるのか、タリバーン、そのとおりなんですね。もう一度このタリバーンのところを読んでみますね。

アフガニスタンからの情報によると、同国のイスラム原理主義勢力タリバーンと闘っている北部同盟の最高指導者マスード氏が、9日爆弾テロに遭い重傷を負った。10日のロシアのイタルタス通信は死亡したと伝えた。実際にこのマスード氏というのはこの事件で死亡していました。

細かい話、この事件の流れを読む上で皆さんにも考えてほしいので、ちょっとその細部にまで立ち入りましたね。この短い記事とこの大きな記事をつなぐもの。それはもちろんタリバーンでもいいんですが、タリバーンの頭にあるイスラム原理主義勢力という言葉が、この2つの短い

記事と大きな記事をつなぐ重要なキーワードですね。

というのは、これだけの大きな事件を一体誰がしてかしたんだということが少し気になります。この最初の速報の中でも早速それが出ていますね。ロンドンのアラビア専門紙はロイター通信に「亡命サウジ人のオサマ・ビンラディン氏が2週間前、合衆国に先例のない大規模な攻撃を加えると警告を発していたイスラム原理主義者の犯行に間違いない」この2本の記事を結びつける重要なキーワードがイスラム原理主義というものであるということが、ここで少し見えてきますね。

それでは、次のパワーポイントお願いできますか。

この事件、皆さん知らない方も、そのときに直接体験していませんね。僕たちのような世代はもちろん忘れることはできません。本当にきのうのこのように今でも思い出します。大ざっぱにさらっておきましょうね。

9.11 同時多発テロというふうに呼ばれています。もちろん発生は2001年9月11日午前9時前後、これはアメリカ東部の時間ですから、日本でいうとちょうど午後10時。この新聞、最初のこの左側の新聞を日本の読者が読んだのが、その日の朝刊が配られたときですね、朝。そのほぼ12時間後にあの大事件が発生したわけですね。

この事件の特徴は一言で言えば、アメリカ本土への史上初の武力攻撃。アメリカというのは建国240年ほどになりますが、これまで本土に武力攻撃を受けたことはない。非常にある意味幸せな国民、国家だったんですが、そこに初めて武力攻撃が加えられた。もちろんその攻撃は大砲でもミサイルでも爆弾でもない。航空機ということでしたが、武力攻撃。非常に特殊な武力攻撃というふうに考えてもいいでしょうね。犠牲者、さっき倒れたビルにいた人を中心に3,000人に達しましたね。

次、お願いできますか。

この形態は、さっきも言ったようにハイジャック機による米国重要施設への体当たり攻撃。4機の飛行機を一気に乗っ取ったんですね、このイスラム原理主義者と言われる人たちは。そのうちの2機がさっき写真で見たツインタワーに体当たりしました。建物が2つあるので2機乗っ取ったということでしょうね。

3機目、これはアメリカの国防総省、バージニア州といって南部の北の端にあります州ですね。4機目、これはアメリカの大統領府、皆さんもホワイトハウスという名前で知っていると思いますが、そこを狙ったのではないかと見られています。幸か不幸か途中で墜落したので、この攻撃は未然に防がれましたが、もちろん航空機に乗った方が多数亡くなったわけですね。決して幸とは言えないのかもしれない。

よく見てくださいね。世界貿易センタービル。アメリカという国が世界の富の4分の1を占めている国ですね、世界最大の経済大国です。その経済活動の中心、まさに世界経済の中心でもあるその中心、世界貿易センタービルを狙った。

国防総省、もちろんアメリカの軍隊の元締めですね。日本でいう防衛庁に相当しますが、アメ

リカという国は世界で使われる軍事費の半分近くを1つの国だけで消費している大変な軍事大国、腕っぷしの強い国です。言ってみれば世界192ある国のうちのほかの全部の国を回して、1国だけで戦う力を持っている。そういう恐ろしい国なんですね。とんでもない国です。そういう軍事経済をまとめているのはもちろん政治。その中心が大統領。その大統領が執務するところがアメリカの大統領府、つまりホワイトハウスですね。

つまり、このテロというのは、アメリカの軍事、政治、経済の中枢を同時に狙ったという極めて大胆不敵なテロ攻撃だったということが言えますね。

それでは次、このテロが起きた国はもちろんアメリカ。そのちょうど地球の裏側に当たるようなここにアフガニスタンという国があります。非常に貧しい国です。日本はここですね。

さっきオサマ・ビンラディン氏という名前が出てきました。サウジアラビア出身という表現がありますね。サウジアラビアというのはここに 있습니다。ヨーロッパがあり、アフリカがある。この地球の裏側にあるような国が出撃拠点になって、このアメリカを攻撃したということですね。

次のパワーポイントお願いできますか。

アフガニスタン、皆さんアフガニスタンも知っていました。タリバーンも知っていました。ですから話がしやすい。もう一度おさらいしておきましょうね。アフガニスタン、今言ったような国です。タリバーンというイスラム原理主義の人たちが政権をつくっていました。イスラム原理主義って何でしょうか。世の中には宗教がありますね。皆さんのお宅には仏壇があるお宅は多いはずですが、仏教。キリスト教を信仰しておられる方もいるかもしれません。キリスト教、イスラム教というのがあります。

イスラム教というのは、キリスト教に次いで世界で信者が多い、影響力の強いその宗教の教義に極めて忠実な人たちで、その教義の精神が侵されるようなら、それを侵す相手は暴力で攻撃してもいいんだということを考えているような人たち、それをイスラム原理主義集団というふうに呼びならわしますね。イスラム原理主義集団、そのような人たちです。

そういう考えを持った人たちの中の、タリバーンと呼ばれる人たちがアフガニスタンで政権を握っていました。当時、そのアフガニスタンは内戦状態にありました。反タリバーン勢力、さっきの記事では北部同盟という名前が出ていましたね。タリバーンに反対する人たちが武器をとって戦っていたんです。内戦状態だったんです。これがアフガニスタンの現状です。

さあ、アメリカでテロを起こしたイスラム原理主義勢力、ビンラディン、ビンラディンという人の名前が出ていましたね。ビンラディンがつくった組織がアルカイダ。アルカイダという名前、聞いたことありませんか。ありますね。ビンラディンという名前も知っていますね。

そのビンラディンが率いている集団がアルカイダ、世界のあちこちで今でもテロ行為を起こしている集団です。繰り返しますが、この人たちはイスラムの教義を侵すような人たちはテロで、テロ行為で抹殺してもいいんだということを考えている人たちです。

タリバーンもアルカイダ、ビンラディンも、どちらもイスラム原理主義ということで共通して

いますので、タリバーン政権は実はアルカイダ、ビンラディンをアフガニスタン国内にかくまっていたわけですね。庇護していました。

このアルカイダ、アメリカへの攻撃を企てました。さあ、アルカイダも人間です。皆さんも人間です。人間というのはそんなに違うものじゃないんですね。だからアルカイダが考えることは、皆さんもある程度イメージできるはずなんです。これが新聞の1つの読み方です。事件、大きな出来事の当事者になったつもりになって、記事を読むと、記事が非常に身近に感じられます。

アメリカのオバマ大統領も日本の野田首相も同じ人間なんです。そんなに変わらないんです。さあ、じゃ、皆さんがアルカイダのビンラディンになったつもりになってみましょう。そのビンラディン、アルカイダはあしたアメリカに攻撃を加えます。つまり、皆さんでいえば、非常に強い同級生に、いきなり後ろからパンチか回し蹴りをくらわす。そういうことをあなたは決行することになったんです。

次の一手はどうなと思いますか。次に何が起きると思いますか。考えませんか。考えるでしょう。非常に強い相手に後ろからガツンと一発蹴りを加えたわけです。相手はどうなりますか。どうしますか。倒れますか、「あいたたた」と言いますね。黙っていますか。黙っていませんか。どうしますか。仕返し、そう仕返しするでしょう。当然のように仕返しします。ビンラディン、アルカイダ、これだけのすさまじいテロ攻撃を加えたら、アメリカは当然のように仕返しをしてくる。つまり、アフガニスタンに兵隊を派遣して、タリバーンやらイスラム原理主義のアルカイダを潰しに来る。実際そうしたわけですね。

さあ、アルカイダはそれだけじゃなしに、アメリカがどういう形で反撃を加えてくるか、そこまで計算したわけですね。それはこのアフガニスタンの中の政情の状況を考えたら、誰もが考えつくことなんです。あなた今度じゃ、アメリカの当時のブッシュ大統領だったとしましょう。どういうふうにあふガニスタンに攻撃を加える、それが一番楽な攻撃の仕方であると考えますか。

○ アフガニスタンの反政府勢力を応援する。

○中川 そうですね。そのとおりです。あなたは今ブッシュと同じことを答えました。ブッシュ大統領もそうしたんです。反タリバーン勢力を応援するという形で、介入をしようと。これはもうアルカイダもビンラディンも読んでいたんです。ですから、この人を抹殺してしまったわけですね。その狙いがありますね。

マスード司令官は非常に有能で、指導力のある人だったと、当時誰からも思われていました。このマスード司令官がいるからこそ、反タリバーン勢力はまとまっているんだとさえ言われていました。

もし、将来反タリバーン勢力がタリバーン政権を倒して新しい政府をつくったら、間違いなくその大統領になる人、確実だと言われていました。そのマスード司令官を抹殺するとどうなりますか。バラバラになる。思うつばになったんです。

次のページに行ってもらえますか。

同時多発テロがありました。アメリカは皆さんが予測したようにすぐに反撃に出ました。たった3カ月でアフガニスタン戦争が始まりますが、それはアフガニスタンの反政府勢力を支援するという形で行われました。

その流れの中でイラク戦争が起きたんですね。イラク戦争はとりあえず終わっていますが、アフガニスタン戦争は今でもまだ続いているんです。この間2つの戦争にアメリカは1兆ドルのお金を費やしたと言われていていますね。今のレートで80兆円。日本の国家の1年間の予算にも匹敵するぐらいの膨大なお金を使って、アメリカは今疲れ切っています。非常に疲れ切っています。そのことが世界に大きな災いをもたらすということが事実なんですけれども、タリバーン、アルカイダはあのビルを壊すことが目的ではなくて、それでもってアメリカを戦争に引きずり込んで、それを長期化させて、アメリカを疲弊させる、疲れさせる、これが狙いだったんです。

そのために、相手にとって大変重要な持ち駒であるマスード司令官というのを抹殺するということをしたわけですね。それが結果的に当たってしまったわけですね。アフガニスタンの戦況がいつまでもよくならないんです。今でもこういう記事が載るぐらいですね。これが2月27日、アフガン状況の中でアフガニスタンでオバマ政権打つ手なし、泥沼状態で抜けように抜けられないんですね。そういう意味でアメリカに対して戦いを仕かけた、アルカイダという勢力、そのタリバーンとの連合体が打った手が何と、ズバリと当たってしまったかという、その流れがこの記事の最初の源流、まさに水源と書きましたが、水源であるこの記事を読み解くことによって、その構図が非常に明らかになってくるんだということですね。

新聞の記事の中にはこういう小さな記事で、実はとても重要なものがごろごろと転がっています。それを皆さんは日々水を無駄に流すように、右から左に流してしまっているかもしれませんね。そうだとしたら、余りにももったいないと言わざるを得ないんです。

ついでに言うと、ここで一つ皆さんに考えてほしいこと。何でもこまでしてイスラム原理主義勢力というのはアメリカを憎んでいるのでしょうか。ちょっと考えてみたことがありますか。今すぐそう言われても無理ですね。これは大変に現代の世界の中で大きな問題をはらんでいるんです。なぜそこまでしてイスラム原理主義勢力はアメリカを憎んでいるのか。これはもし皆さん、きょうのこの話を聞いて1つ何か伝えるとしたら、このことに少し興味を持ってくださいね。そうすると世界が見えてくるからです。

実は、皆さんに読んでもらったこの記事の中に1つだけ、そのヒントが別の記事であるんです。そのことに話が進むとまた時間がかかりますから、後は皆さんでそれを探してみてくださいね。

それでは、パート2に行きましょうか。

ここでは今国際報道、皆さんが難しいなと思っている国際報道について考えましたが、今度は社説です。社説もまた顔を伏せた人がいましたね。社説好きですか。社説読んだことがありますか。余り読まないですね。

はっきり言うと、社説というものは、余り読まれない記事の代表のように言われています。だ

けれども皆さんは社説をばかにすると痛い目を見るかもしれないのは、この紙を見てくださいね。こんなことを書いています。

全国の大学、短大の5校に1校が新聞記事を入学試験に採用するということを考えるとちょっとそわそわしますね。しかもその入学試験に採用される記事の一番頻度が高いのは、新聞に出てくるコラム、それから社説なんです。ですから社説をもし本当に読みこなせるようになっていると、皆さんの入学試験の合格率が上がるかもしれないわけですね。

何で、新聞というのを大学がこんなにまでして新聞記事を熱心に取り上げるかというと、非常に簡単なわけであります。

僕も今は試験問題を採用するという立場なので、出すという側になるので、過去問ということが気になるわけですね。過去に出た問題とのダブリを避けたいという気持ちが入試の問題をつくる側にあります。その場合、新聞記事というのは一番無難なんです。絶対に過去問にひっかかる可能性がありません。できたてのはやほやです。それが1つの理由です。

それからもう一つ、社説というのは、私も書く側にいた立場です。社説というのは、読まれたい、特に若い人に敬遠されているということをよく心得ていたので、書く立場の心理から言うと、少しでも魅力のあるものにしたい。読み手の心を引きつけたい。心を捉えたい。特に若い人たちの心を捉えたいということ、少し言葉の表現を使って言わせてもらおうと、くどき文句をちりばめるわけですね。心をつかむための。

それが実はかなり新聞の社説のような場合、記事の本質に直接触れるような表現や言葉が多いので、私はここで1つ皆さんに社説を読むコツというのに、こういうものがあるということをお話してみたいと思うんですね。

パワーポイントお願いできますか。

実は、今言いましたように、社説は書いている筆者の心理は、皆さんの心を引きつけるために、言葉に特に神経を配ります。ここに2枚目の紙になるんですかね、社説を1つ取り上げてみました。これもやはり去年の春の入試に出た問題です。北海道教育大学が取り上げましたね。「変わる高校生」。「変わる中学生」という社説があれば一番よかったんですが、皆さんに一番近いなという感じがした、この「変わる高校生」という社説を取り上げて、その中にどんな言葉がちりばめられているのか、ということをお話ししてみようね。

日本には337万人の高校生がいる。教育機関などの調査によれば、3人に2人が自分はだめな人間だと感じ、10人中7人は憧れている人がいないと答える。そして7万人が中退です。皆さん、こういう生徒だとはもちろん決してないけれども、どこかわからないでもない部分があると思いますね。僕だってそうなんです。

そこで、この社説はどんな言葉を使っているか。大人になる手前でこんなにも縮こまっている子供たち。心のスイッチ、それをカチンと押す。ちょっと変わった表現だと思いませんか。ですから、そう思ったら、それをまずメモでもいいから拾いだして書いていきましょう。心のスイッ

チ、カチンと押す。俺も高校のときはだるいというのが口癖だった。だるい。皆さんだるいって言いますか。教師の一言で変わったんだよね、ズボン、腰ばきの制服姿、次第に聞き耳を立てている。

腰ズボンですか。あなたは腰パンしたことはありますか。腰パン、ありますか。そのときだるいですか。気持ち。だるいとか、腰パン。ありますね。でも大人から見るとそういった人たちはやっぱりだるいんじゃないのかな。

次に、そういった高校生の中にちょっと変わった集団が入ってくるわけですね。NPO 法人カタリバ、これは何か高校生より少し年をとった学生のボランティアのことのようです。カタリバという言葉もちょっと引っかけますね。片仮名でカタリバ。これも抜き出してみませんか。

このカタリバのだるい腰ズボンの高校生の関係が、その後半のほうで斜めの関係というふうに表現されていますね。そんな斜めの関係が窒息しそうな彼らには必要なだろう。

さあ、これだけの言葉をとりあえず抜き書きしたら、今度はそれを並べてみませんか。

はい、お願いします。

こんなふうに並べてみました。心のスイッチという言葉がやっぱり見出しにもなっているんですから、この記事の中核的な部分を占めていますね。スイッチですから、いわゆるオフとオンの状態が当然あるわけです。それを想定してこの記事が書かれているわけですね。

オフ状態って何なのかな、この記事を読めば一目瞭然、だるいとか、腰ズボンの状態、これがオフの状態ですね。さっきも言いましたが心を閉ざしてはいけません。オフの状態ですずっといられるわけではないですね。オンの状態にすることのほうが望ましいんです。オン。それをするのが誰か、カタリバという不思議な名前の集団ですね。それがカチリと押すことによって、このスイッチがオンになる。こういう脈絡が明らかになりますね。

ここでカタリバというのは、片仮名書きでおもしろくなっているんですが、明らかにこれは漢字でいうと語り場、これをもじってというか、片仮名化しているわけですね。ここではカタリバといわれる人たちが実際に語り場をつくって、自分たちより少し年下のだるいとか、腰ズボンの高校生と語る場をつくっているという関係ですね。これを社説は斜めの関係と称しているわけです。表現しているわけです。

たまたまこれは社説に載っている、本当に斜めの関係なんです、斜めの関係。当然皆さんここで1つ考えないといけないと思うんですね。斜めの関係があれば、縦の関係、横の関係が当然想定される可能性。あなたにとって縦の関係って何ですか。

学校の先生、そうですね、いろいろ常日ごろ適切な指導をしてくれる。それからもう一つ、親ですね。そうです。縦の関係は皆さんにとって先生であり、ご両親ですね。

では、横の関係は何ですか。横の関係は。友達ですね、同級生です。それが横の関係です。

皆さんの世界は、圧倒的に縦の世界と横の世界ですね。それが皆さんの世界だけれども、それをもう少し広げたらどうなるかな。そうすると皆さんの世界がさらに膨らみ、広がりを持たせて、

そこで、もし皆さんがだるかったり、腰ズボンだったり、そういう状態だったとしても、もしかしたら、その皆さんの世界が広がることで心のスイッチが押されて、心を開くことになるんじゃないかと、こういう脈絡が伺えるわけですね。それがこの社説の趣旨です。

それをもう少し理屈っぽく新しい公共という考え方を最後に取り入れています。教育という分野で、最後のところですね、この社説の最後。教育という分野で新しい公共を担い始めた新世代、彼らが活動しやすい社会づくりを、そのまた少し先輩の大人として考えていきたい。

公共というのは、ここにあるとおり、みんなとともに生きるというふうに考えてもいいかもしれませんね。そこに新しい概念という問題を持ちだした。皆とともに生きる生き方は皆さんも既に持っているわけですね。それは縦の関係であり、横の関係であり。先生のご指導を受け、家庭ではご両親に生まれ、そういう形で皆さんの公共、それから学校へ来れば同級生がいる。でも、そこにもっと新しい膨らみを持たせたほうがいいのではないかとという考え方は、実は皆さんに直結するということだけじゃなくて、社会全体に今急に膨らんできた考え方であるということも事実なんです。

新しい公共という今の時代が求められている1つの考え方に、この社説は学校の現状を結びつけるという形をとったんですね。

いずれにしても、この社説というのはとても読みにくいんですが、1つの読み方として、こういう心に響く言葉を拾い集めて、それを並べ直してみると少し見えてくるものが違うんじゃないかという感じがするんです。そうすると、皆さんが何年後かに迎える入試の季節にも役に立ちますよと、これはちょっと余計なおせっかいでしたね。でも役に立つものは役に立つんだから、いいと思いますね。

では、パート3。パート3は社会面というものの存在を、皆さん知っていますか。社会面って知っていますか、社会面。新聞の社会面。新聞の社会面って知っているかな。

新聞の社会面というのは、新聞でいうとラジオテレビ欄がこれですね。このラジオテレビ欄を後ろから開くと社会面。皆さんに一番身近な出来事が取り上げられている欄だと思ってください。

ですから、皆さん一番読みやすい欄はやっぱり社会面だと思います。楽しい話題もありますけれども、やっぱり悲しい事件が多いですね。楽しくても悲しくても皆さんに身近であるがゆえに、皆さんにとってはとても読みやすい欄だと。だから、社会面、今まで国際ニュースとか社説、パート1、パート2ではそういったものに体当たりでぶつかっていましたが、社会面はどちらかというと、それほど歯を食いしばってぶつかる、そういう必要はないかもしれません。比較のスムーズに皆さんの心に入ってくるんじゃないかなと思います。

実は、ここに挙げたような事件は、もう毎日のように社会面に出ていますね。皆さんもよく目にすると思います。これはたまたま、実はこの資料をつくっていたそのときに起きた報道された出来事なので、これを採用したということです。たまたまということで考えてください。

大分で起きた事件です。九州の大分県で2歳の娘さんが去年の6月から行方不明になっていて、皆で探していたんですが、2月の時点になって、実はその死体の遺体をお母さんが捨てていたということが発覚したわけですね。そのお母さんがつかまりました。

もちろん、このお母さんが自分で手をかけて娘さんを殺したのかどうかということはわかりません。少なくとも死体をお母さんが捨てたということまでは、お母さん自身も認めていますね。ここで皆さん考えることは、当然この2歳の女の子はかわいそうだなと思いますね。逆にお母さんはひどいお母さんだな、どうしてこんなことをするんだろう。

大抵の社会面の事件、あるいは出来事に対して、多くの読者はそういう見方をして、それは極めて当然なんです、そこで終わってしまうのが通常だと思います。ここで皆さんには、もう一つ考えてほしいんです。

さっき皆さんは、ブッシュ大統領であれ、オバマ大統領であれ人間だから皆さんと考えることはそんなに違わないんだと私は言いました。同じように、自分の娘さんにもしかしたら手をかけたかもしれないお母さん、このお母さんに自分を置きかえてこの記事を読む。こういう考え方もできたら、ぜひしてほしいと思うんですね。そうするとやっぱりこの記事もやっぱり別のものが見えてくるんですね。

この記事は、たまたま2月6日の朝刊、夕刊に相次いで報道されていました。最初にまず2月6日の朝刊、右のほうの記事ですね。ここにもやっぱり非常に気になる表現があるんですね。琴音ちゃん、この女の子ですね、琴音ちゃんは足の筋肉が弱く、1人で歩き回れない。こういう子供さんだったわけですね。つまり体に障害を持っていたんです。その左の記事にも気になる記述がありますね。このお母さんには旦那さんがいました。この旦那さん、容疑者の夫は、フェリーの船員で長期間自宅をあけることが多かった。ちょっとこの2つ、これが気になりますね。

この容疑者の35歳の女性です。ちょっとだけ彼女の立場に立ってみましょう。足に障害を抱えた子供を1人で、家で育てていたということですね。どうでしょうか。最近起きる事件、このような事件はみんな共通していますね、子供を育てる負担は全部女性、お母さんにのしかかっているわけです。誰も助けてくれないです。この回りが助けてくれていなかったかどうかわかりませんが、少なくとも旦那さんは長期間自宅をあけることが多かった。一体、こんなことでいいのだろうかということを考えてもいいかもしれませんね。

次のページをお願いしますか。

まさにここです。ここで考えてみたいんです。このお母さんはどんな境遇に置かれていたのか。境遇はわかりましたね。そこで、この境遇のままで置いていいのだろうか。このお母さんだけが特別に弱かったわけではないということは、同じような事件が頻繁に起きていますね。普通の女性ならばこういう苦しい状態に置かれたら、やっぱり自分の子供に手をかけてでもという気持ちになってしまう。やっぱり、そのときに当然こういう女性、お母さんは助けを求めているわけですね。

助けを求めたくても、普通なら皆さんのお宅にも、おじいちゃんやおばあちゃんのいるお宅があるかもしれません。もしおじいちゃん、おばあちゃんがいればおじいちゃん、おばあちゃんに助けを求められますね。旦那さんに助けを求められるかもしれない。だけれども、今の家族のあり方を考えてみると、おじいちゃん、おばあちゃんが同居している、いわゆる3世代家族というのは、もう10%にも満たないですね。圧倒的に多いのがご両親と子供だけの2世帯家族。つまり核家族と言われるものですね。

そこで唯一頼りになるはずのご主人、旦那さんは、実は日本の特殊な事情で単身赴任という現象も非常に多いですね。今日本に単身赴任世帯が3万世帯あるというふうに言われています。日本だけの特異な現象なんですね、単身赴任というのは、少なくとも欧米ではあり得ないというふうに言われています。あっても非常にまれなケースであると。

では、子供を少しでもどこかに預けるところがあれば、そこに預ける間、お母さんの負担が減るのではないかな。けれども今児童保育で問題になっているのが待機児童ですね。保育所が足りないんです。ですから預けたくても預けるところがない。そうするとやっぱり家で1人で育てないといけな。お母さんにやっぱり負担がどんどのしかかってくる。これじゃあ、やっぱりだめなんでしょうねという考え方が、だんだん日本の中に強まっています。

少子高齢化と言われます。それだって余りに子育てがお母さんだけの肩にしわ寄せがいくならば、子供を産みたくなくなるかもしれませんね。そういった事態を少しでも解消するためにも、やっぱり子供は社会で育てていく部分がなければ、これからはやっていけないのではないかなということになりますね。この話はまさに社会の話であり、同時に政治の話である。

下のところにちょうど2月8日、ほとんど時を同じくして、こういう記事が政治面に出了。消費増税3%分まず年金という記事ですね。こういう記事になると皆さんは、やっぱり難しいなということになってしまうわけですね。だけれども、上の記事と下の記事とのつながりをもう一度考えてみてください。やっぱり社会は今この子育てを、その子供のお母さんだけに任せていたんじゃないんだと。社会全体で養っていく分がないと、これからの日本はやっていけませんよということですね。

当然ながら、子供の子育てを社会で負担していくということになれば、そのためのお金が必要です。お金はどこから出てくるんですか。今日本、お金がありませんね。そこで起きてきたのが、1つは今大騒ぎになっている消費税問題というのもそうですね。これを導入すべきだ、導入しているんですが、この消費税をさらにふやす必要があるのかどうか。

それは、現在の政権がやっている子育て手当ですね、これも毎日毎日いろいろなところで皆さん活字でも目にするし、テレビでもやっていますね。この消費増税3%分の中にも子育て手当の記述が出てきます。

3%増税したら、そのうちの0.5%分は子育てなどの充実策に充てると書いています。今国会でけんけんごうごう議論している消費税、子育て手当というのは、実はこの事件と密接に、本当に

密接にかかわっていることなんですね。多くの皆さんは、そういう関連性で記事を読むという読み方をしていません、残念ながら。皆さんにぜひ勧めたいのは、記事というのは多面的に見ていく必要があります。そうすると読みにくそうに見える消費増税3%分、まず年金といったようないわゆる政治記事も、少し皆さんの身近なものに近づいてくることは間違いないと思うんですね。

以上、述べたことを少しまとめて述べさせていただきます。

記事の水源を掘り当てるということがありました。これは主に最初の例のイスラム原理主義のことについてということですが、ある1つの事象は川の流れのようなものです。きょうの2月27日のこの記事と、9月11日のこの短い記事は川の中流にあると思いますね。9月11日の短い記事はひょっとしたら水源の1滴と位置づけてもいいかもしれません。

出来事というのは日々流れています。これはちょうど川の流れのようなものです。皆さんがある日、ある瞬間の1事象だけを取り上げられた記事を読んでもわかりにくいのは、その前の流れがどのように流れてここに至っているのかということを知らないからでしょうね。それを知っていれば、ずっと今の川の様子の意味がわかってくるはずです。そのために必要なことは、やっぱり、できれば毎日新聞を読んでほしいということですね。

その次です。

言葉のつながりを考える。記事を書く書き手がそうなんです。やっぱり伝えたいことは短い鋭い言葉で伝えようとしています。その言葉を一つ一つ探っていく読み方があっていいと思いますね。例えばもし皆さんがきょうこの私の話の写真の中で、もしイスラム原理主義という言葉に関心を持ったなら、あすからしばらくは、新聞の中からイスラム原理主義という言葉だけを引っ張り出して読んでいくという読み方をしてもいいかもしれませんね。

あるいは消費税という言葉に対して関心を持ってもらったならば、その消費税という言葉だけに焦点を当て、新聞の記事を集中的に読むという読み方をしてもいいかもしれません。新聞の記事に使われている言葉を大切にしてほしいということです。

3番目、関連性、こういう言い方をするとまた難しくなりますが、川の流れを最初に言いました。この川の流れは1本ではありません。アフガニスタンの中に見られるイスラム原理主義の流れとは別に、消費税というまた別の川が流れているわけですね。もしくは社説で取り上げられた新しい公共という川の流れもあるわけです。

でも、新しい公共というのは、少なくとも明らかにこの消費税の議論とは近くの水脈でつながっていますね。新しい公共、今までの社会のあり方ではまだ不十分であり、その社会の広がりを、膨らみをもっと持たせなくてはいけない。社会が担うものをもっと拡充していかないといけない、ふやしていかないといけない。充実させていかなければいけない、その議論と消費税の議論では実は直結する話ですね。

川の流れがたくさんあるというのが実は今のこの社会、世界ですね。大阪には大和川もあれば、淀川もある。その流れを一本一本見ているだけではまだ不十分。その川の流れは地下の水脈でつ

ながっている、その地下水脈に至るところまで理解したら、皆さんの現代理解、世界理解は広いところに進んでいくと思います。当然ながらその作業は皆さんの新聞の読み方ということも密着したものになっているかもしれませんね。

長い話になりましたが、皆さんに、これから何か新聞を1日1回でも読んでほしいなと思う気持ちになります。その場合、1つ言葉に注目して、その言葉に沿って新聞を読んでいく。そういう読み方もあるのではないかなということを感じたので、それを最後のまとめにしたいわけですね。

そこで、やっぱりもう一度強調したいのは、新聞を読めば読解力がつきます。それでやっぱり世界が多面的に見えるようになります。これが一番大きな成果ですね。ですから、新聞を読まないなんてもったいないという気持ちが痛切にします。もし、皆さんにもそういう気持ちが少し入ってきたら、本当にこれほどありがたいことはないと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

本稿は2012年度帝塚山学院大学国際理解研究所主催の第16回国際理解サロンにおける講演をまとめたものである。